コロナ禍×イノベーション×地方創生

Newsletter

2021 年 4 月 1 日 ＃13

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
発行元：Japa 日本専門家活動協会 http://www.japa.fellowlink.jp/

INDEX

1. コラム「論点提起」： やめる決断ができるか如何
2. キュレーション「関連情報＆Topics」： コロナ禍×イノベーション×地方創生
3. 紹介「海外に学ぶ」： TOD（公共交通指向）型再開発で賑わいと産業再生を目指す」
米国・デンバー・Denver, Colorado 1（Japa 理事 小畑きいち：青山学院大学元客員教授）
4. 寄稿 ： セカンドキャリア 20 年の振り返り （一般社団法人海鈴大磯 代表理事 富山 昇）
5. 稽古照今・寄稿 ： 童謡爺さんのどうよう語り 第九話・第十話 （作詞・作曲家 高橋育郎）
6. 解説「関連データ・用語・仕組み」： VUCA(ブーカ)と OODA(ウーダ)
7. Blog 仕組みの群像 ： 東日本大震災 10 年の振り返り
8. Japa からのご案内
9. つぶやき（編集後記に代えて）

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人（芝原 靖典）による。

※ **本号から、「メルマガ」から「Newsletter」に表記を変更しました。**
本 Newsletter は、Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日に発行する会員向けの月報「イノベーション×地方創生」です。2020 年 4 月 1 日よりとしてスタートしましたが、今般のコロナ禍を受け、コロナ禍の状況、影響、対応等に強い関心が寄せられているため、よりコロナ禍を意識した「コロナ禍×イノベーション×地方創生」として、Japa 会員、寄稿者、及び会員・寄稿者の紹介による関心者の方々に、当面の間、無料配信するとともに、HP で一般公開（1 ヶ月遅れ）することに致しました。さらに、本号（4 月 1 日号）より、これまでの「Japa メルマガ」から「Japa Newsletter」 と表記を変更いたしました。

※ 本 Newsletter は、双方向型の意見交換・交流等をめざしています。Newsletter の各コーナーの内容に関するご意見、執筆者・寄稿者との交流希望等をお寄せください。

※ Japa は「**新型コロナウィルス感染症特設コーナー**」 https://www.japa.fellowlink.jp/blank-25 を開設して、アーカイブすべき情報を随時アップしています。ご活用下さい。また、アーカイブすべき情報があればご連絡ください。

1. コラム「論点提起」：やめる決断ができるか如何

2021 年 3 月 25 日、変異株によるコロナ禍の拡大リスクが高まる中、聖火リレーが福島県の楢葉町と広野町にまたがるサッカー複合施設「Jヴィレッジ」（福島第一原発事故後、約 2 年間事故対策拠点として利用）からスタートした。はたして、ワクチン検査、ワクチン接種も進まない中、感染拡大の源にならず、Goal（7/23 東京・国立劇場 開会式）まで運べるか。はたまた、海外観客の受入れをしない中、リスクを犯して、海外の選手が日本に来てくれるのか。変異株による第 4 波が夏に到来しないことを祈るのみである。全ては、日本国内はもとより、世界のコロナ禍の状況にかかっている。
▼聖火リレーに「コロナを広げる気か！」と怒り 五輪最大スポンサーも「ナチスと同じ愚は犯すな」と鶴の一声（2） 2021 年 03 月 26 日 20 時 15 分 https://bit.ly/3dq0OKv

グローバル金融資本主義、新自由主義の弊害が目立ち始め、その転換が模索されているが、肥大化したスポーツビジネス/商業主義も、コロナ禍の中、その本質が問われている。立ち止まって冷静に考える必要がある。スポンサーや代理店が運営を左右する程の影響力を出しうる開催経費を要する規模の大会を開催する意義はなにか。。コロナ禍は事の本質を問うている。

そもそも、昨年の開催が 1 年間延期された時点でも、コロナ禍の収束には数年かかると云われていた。延期でなく中止という判断もあったのだが、日本はなかなかそうした「やめる決断」ができない。事を停止するか、進めるかの判断は感情論的には難しいが、合理的に判断すべきである。
▼「やらない選択肢ない」東京五輪関係者が明かす、組織委の旧時代な体質【匿名インタビュー】HuffPost Japan 2021 年 03 月 25 日 https://bit.ly/31muEtE

「止められない公共事業」「変えられない政策・制度」がかねてより云われてきたが、コロナ禍がそうした流れに終止符を打つ機会かもしれない。人口構造の変化（超高齢化、総人口減少）、国土構造の変化（全国の森化）は歴史的な時代の流れであり、コロナ禍以前（人口増加・経済成長時代）の仕組みを変えざるを得ない。デジタル化/DX 化はそれをさらに加速させるべく作用する。

日本は、計画を一度決めると、その前提条件を忘れ、遂行することが目的化する。遂行するための手段が目的化する。最近、行政までもが多用する PDCA にしても、予定調和的な Plan（計画）を是としてのサイクルであるが、これだけ状況が頻繁に、複雑に、時には激変する時（いわゆる VUCA 時代）に、予定調和的な PDCA が有効なのか。状況に合わせて、計画の前に戦略が必要であるとする OODA ループ（後述 6. 用語解説 参照）こそが必要ではなかろうか。

さらには、計画する場合に、計画決定するには判断情報が足りないこともままある。そうしたときは、その時点で全てを決めずに、機会逸失のリスクとの見合いになるが、判断できるときまで「判断保留/計画保留」とするべきである。一時期に全てを決めすぎることもやめる必要がある。

高度成長期の成功体験を引きずった従来の常識、そして埋没費用（Sunk Cost）にとらわれず、未来志向で合理的に「やめる決断」ができるか否か、日本の今後を左右すると思料されるが如何。

2. キュレーション「関連情報＆Topics」：コロナ禍×イノベーション×地方創生

▼マスク氏が主導、打ち上げ 1000 基突破　＝「小型人工衛星シンポ」をオンライン取材＝　2021 年 03 月 02 日　RICOH　http://blog.ricoh.co.jp/RISB/technology/post_656.html
本記事は、リコーの研究員による 2021 年 2 月 8～11 日にオンラインで開催された「スモールサット（小型人工衛星）シンポジウム」の取材インタービューの短い記事であるが、その内容は大きい。現在は、「海上を含む地球上の 90%の地域で十分な接続ができないが、近い将来、地球上のどこでも人工衛星を活用し、ネット接続できる日が到来する可能性が高まってきた」とのこと。そのリード役がイーロン・マスク氏率いる「スペース X」(宇宙ロケット打ち上げ)であり、「スターリング」(人工衛星を活用したネット接続サービス)である。スターリンクは、「2020 年に 773 基の小型人工衛星を打ち上げ、その累計は 1000 基を超え、北米の一部地域を対象に β（ベータ）版テストを実施中で、1 万人を超える試用者」がいるとのこと。「正式サービスの対象国は米国にとどまらず、地球上のほとんどの地域をカバーする計画」(日本も含まれる)」という。これは通信の一大イノベーションをもたらす。コロナ禍の中でもイノベーションは進んでいる。地上戦から宇宙戦の時代に入ったことを実感させられる。日本にもこういうスケールのイノベータ企業・経営者が現れて欲しい。
［関連］ スターリンクが通信セクターにもたらす破壊的イノベーション　Forbes　2021/03/15
https://forbesjapan.com/articles/detail/40309

▼緩やかなドローン規制や連邦工科大学人材で、起業多数（スイス）　JETRO　2021 年 3 月 5 日
https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2021/c6bc0942944e3b37.html
JETRO ジュネーブ事務所によるスイスにおけるドローンのイノベーションとスタートアップの状況についての報告である。スイスでは、「ローザンヌ近郊とチューリッヒ近郊にドローン企業群が集積しつつある(ドローンバレー)」とのこと。そうしたドローン産業が成長している理由として、関連研究を行うチューリッヒ連邦工科大学からの人材やハード/ソフトのスタートアップ企業の輩出にあり、ドローンエコシステムの存在を指摘している。その背景には、「スイスの緩やかな飛行規制を生かして有視界外・有視界輸送の実証試験を積極的に進めている」こともあるようである。日本も全国土の 7 割が山地であり、海岸線も長い。ドローン産業が興りうる環境にあることを活かしたドローンエコシステム/ドローンバレーを実現し、地方創生につなげて欲しい。

▼野中郁次郎教授に聞くイノベーション論、「楽しいデザイン思考」ではダメなワケ　2021/03/09
ビジネス＋IT　https://www.sbbit.jp/article/cont1/51704
本記事は、「日本の実践知の生き方がグローバルでどういう意味があるのか。GAFA に負けないイノベーションを起こすために必要なことは何か」をテーマにした対談記事である。「GAFA と正面から戦うのはと違う戦い方、例えば“文化を作る”という日本人が得意とするところなら戦える」(松田雄馬氏)との指摘に対して、「暗黙知と形式知、それに加えてもう 1 つ暗黙知と形式知の相互作用を絶えずサポートするフロネシス=実践知。この三位一体がキーになる」(野中郁次郎氏)と云う。そして、日本のカルチャである「共感が非常に強いことは、忖度が起こる可能性もある。そこからはイノベーションは起こらなくなる」と云う指摘は鋭い。直近 30 年の日本の低迷、さらに昨今の過度の忖度による劣化を想起させる。「知的コンバットを全身全霊でやりあえるか。それは単なるブレインストーミングやデザイン思考における楽しい対話とは異なる」。奥深い。

▼ウィズ・コロナにおける地域創生のあり方について　～新型コロナによる価値観変容等を契機に地域の多様性や強みを活かした取組を～　2021 年 3 月 12 日　日本政策投資銀行(DBJ)
https://www.dbj.jp/topics/dbj_news/2020/html/20210312_203144.html
DBJ が有識者会議を設置して検討した提言である。「新型コロナがもたらした変化は、企業や人々の履歴効果から不可逆的な要素も多いと見込まれる。地域は、その状況を前提としたウィズ・コロナの下、ピンチをチャンスに変えていくという意識で地域創生に取り組んでいくことが求められる」との認識に基づき提言している。提言の中で、「今後は多様な地域の強みや特徴を活かした地域創生のあり方を検討すること」「GDP（国内総生産）や GRP（地域内総生産）のみに囚われない、多様な地域の価値や豊かさを評価する新しい指標を構築し普及させていくこと」等が重要と指摘している。付属資料（PPT 資料）も関連情報や考え方がわかりやすく整理され、参考になる。

▼地域における「若年移住者」の新しい取組みと支援に関する研究　―地域起業（ローカルベンチャー）と中間支援組織の視点から―　共済総合研究　第 82 号（2021.3）　https://bit.ly/2O0xq4L
本研究は、JA 共済総研の研究員による地域起業の中間支援組織の役割に関する研究報告である。成果として、「①若年移住者のチャレンジを応援する場の創造　②チャレンジ支援をコミュニティとして面として広げること　③チャレンジが連鎖するコミュニティを創造することで地域自体に変容を起こすことの3点が連続的に存在すること」が挙げられている。確かにそのとおりで、研究事例の仕組み等は参考になる。残念なのは、JA こそがそうした中間支援組織の主体、あるいは支援・協業主体にふさわしいのだが、そうした言及がないのが残念である。

▼関係人口の実態把握　国土交通省　令和 3 年 3 月 17 日　https://bit.ly/31nBgrJ
最近、国が提唱している「関係人口」(移住や観光でもなく、単なる帰省でもない、日常生活圏や通勤圏以外の特定の地域と継続的かつ多様な関わりを持つ人)について、国土交通省が実施した実態把握調査の結果報告である。調査の結果、「全国の 18 歳以上の居住者(約 10,615 万人)のうち、約2割弱(約 1,827 万人)が関係人口と推計」されている。そして、「農山漁村部に関わる直接寄与型は、関わり先の自然環境に魅力を感じており、移住希望が強いことが判明」したとのこと。関係人口は、非接触・非移動、テレワーク/ワーケーション、副業/複業が進む今後、地方創生において、更にその存在価値が増すのは確実である。多地域兼居・移住等へもつながる。
[関連]地域別・キャリア別にみた移住創業者の実態　日本政策金融公庫総合研究所　2021 年 3 月 18 日　https://www.jfc.go.jp/n/findings/pdf/topics_210318_1.pdf

▼震災に強い都市をどう構築するか―保険/確率に基づいた都市計画に転換せよ―　小黒　一正　独法経済産業研究所　2021 年 3 月 2 日　https://www.rieti.go.jp/jp/columns/a01_0636.html
公共経済学者による震災対応に対する「リスク金融」(自然災害リスクが現実化してしまったときに備える資金対策)が不十分であるとの課題認識から、「従来の流れ（計画→土地→建設→管理→保険）を「逆転」させることだと考える。つまり、「保険/確率に基づいた都市計画」とも呼ぶべきものであり、「保険→管理→建設→土地→計画」という流れを強めるのである」とする提言である。不動産開発、都市計画のプロセス段階で、数字（すなわち情報）に依拠する損害保険会社の介在を促すもので、リスクマネジメント的には理にかなっている。計画者・開発者主導型のプロセスをコントロールする仕組みとしても期待できる。改めて、考えてみる必要に気付かされる。

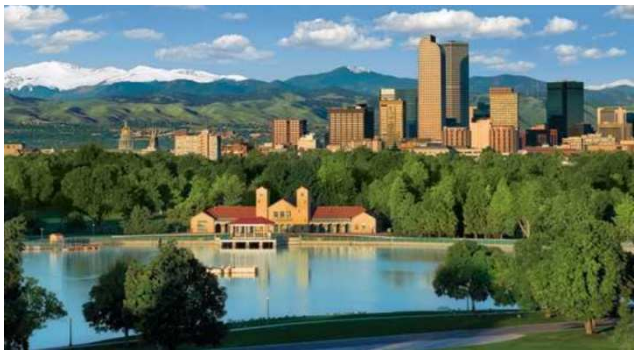
3. 紹介「海外に学ぶ」: TOD(公共交通指向)型再開発で賑わいと産業再生を目指す」米国・デンバー・Denver, Colorado1　(Japa 理事 小畑きいち:青山学院大学元客員教授)

デンバーは米国中部山岳地域のコロラド州最大都市で州都である。人口は 60 万人超、都市圏人口は 250 万人超である。ロッキー山脈の麓・標高約 1.6km の高原都市で"1Mile High city"と称されている。デンバーは周辺の鉱山、油田開発などとともに発展してきた。交通・物流の拠点としても重視され、米国における交通ハブ都市として流通業のみならず、通信・ハイテク企業などの集積も進んでいる。周辺には"ロッキーマウンテン国立公園"、アスペン、ヴェイル、ブリッケンリッジなど有名リゾート地が多くこれら観光スポットへのゲートウエイ拠点でもある。

衰退傾向の打破を TOD 型再開発で

1950 年以降、高度成長拡大期に、デンバーは人口急増による自動車交通量増加によって市内を東西に走る高速道路Ineterstate70 号線でひどい交通渋滞が起き、排気ガスが大量に発生し、デンバー上空に黄灰色の排気ガス雲が頻繁に発生し、大気汚染が深刻となる環境悪化が進んだ。

デンバー周辺の主要道路網


デンバー市内とロッキー山脈遠景

この大気汚染悪化を嫌って、市民はより良い住環境を求めて郊外へと流出傾向が始まった。1950 年頃においてはデンバー市内居住人口がデンバー都市圏域人口の 2/3 を占めていたが、デンバー市の人口流出が流入を上回り、1980 年頃には、市内居住民が 31%減少。人々がデンバー市外に転出居住する傾向が顕著になった。その結果、デンバー市には、マイノリティーと低所得世帯が取り残される傾向が続いた。また、企業投資も活気のある州内を南北に走る高速道路Interstate25 号線沿いの周辺郡・市への移転が進んだ。1980 年後半にはダウンタウンのオフィス・スペースの空室が 1/3 に達するほど空室率が高まり、深刻な状態となった。また、それに伴い、市内の商業販売高も減少し、商業・経済衰退も進んだ。

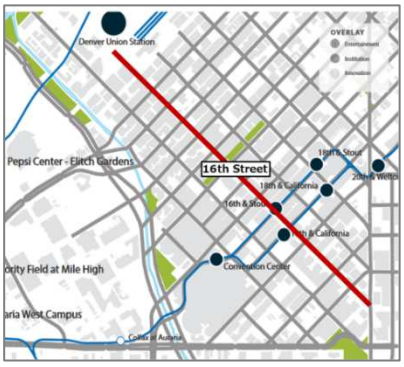
その緊急対応策としてデンバー市は都市再生プロジェクトを立ち上げるも新築住宅も販売低調で成功にほど遠く、建物の建て替えハード重視のプロジェクトの目論みが大きく外れた。その反省からデンバー市は都市再生のあり方の再検討を迫られた。排気ガスによる大気汚染の改善、雇用創生のために経済振興、便利で魅力あり住みたくなる商住街とするために周辺を含む広域的な公共交通指向型 TOD(Transit Oriented Development)型開発へと転向することと決定した。

その計画の核として、中心街"16th Street"をトランジットモールとして再生するとした。

ダウンタウン中心部 ”16th Street”モール再生

デンバーは人口の減退傾向にあったダウンタウンへ居住する人々を増し、賑わいをもどすためには、住むための魅力的な職住商近接の混在コミュニティ形成が必要と考え、都市整備を目指す。人々が行き交い集うなどにより楽しめる街とすることで、「ひと」、「しごと」、「まち」の相互作用によって街に活気を取り戻すことで昼夜の人口増が期待できると考えた。

そのために社会基盤として公共交通網トランジットモール、ショッピング回遊歩行環境、快適な街並み、などの整備を目標とした。便利で快適な生活を指向するという都市型のライフスタイルを好む若年層への魅力向上が第一と考えた。ダウンタウンでの付加価値を向上することで起業ビジネス層を含む幅広い世代なども転入が促進され、ダウンタウンにおける商業も活性化するという好循環が生まれるコミュニティ基盤の創生計画を進めることとした。中心街である 16 番ストリートの再生整備について歩行者優先の商業モールとして再生するために、デンバー・ダウンタウン中心部へのクルマ通行を制限、公共交通によるアクセス向上により中心部に快適で良質な職住商近接の混在コミュニティ形成を目指すこととした。



デンバー中心街 16 番ストリート

16 番ストリート・モール景観

再開発は Denver Urban Renewal Authority (DURA)、RTD（Regional Transportation District)などを実施推進主体とした。 モール全体のデザインは著名な建築家・都市デザイナーI.M.ペイに依頼した。16 番ストリート・モールへの自動車通行規制、高密度な開発、ディベロッパーによる整備コスト負担と債権発行による官民協働型開発とした。トランジットには往復運行のモール・バスと決め、この公共交通プロジェクトには連邦政府運輸省の補助金を受けることに成功した。 また、RTD は必要に応じて資産の購入、売却、リース、開発パートナーとの調整、ステークホルダーに対してワークショップ協働開催などを実施した。Park & Ride を目指してクルマ乗り入れ規制と駐車場の整備を並行して進め、快適移動手段として専用モールシャトルバスの導入を決めた。

優れた街景観、回遊歩行環境、賑わいを誘引するイベントなどの開催により、街路の魅力向上に成功し、若物はもちろん、多くのファミリー層の人気を得て、中心街再生に成功し、商住コニュニティの都市基盤の第一歩とし良いスタートとなった。 （つづく）

［参考］ (1) https://www.rtd-denver.com/
(2) ”Transit Oriented Development Strategic Plan” Denver city Council

4. 寄稿 ： セカンドキャリア 20 年の振り返り

（一般社団法人海鈴大磯 代表理事 富山 昇）

2002年55歳、団塊世代が一斉定年退職を迎える2007年問題に直面し、自分も当事者の立場で、役職定年を迎える会社の仲間と「日経シニア・ワークライフ・フォーラム」を企画実施。
この企画をきっかけに先人の様々な定年後の生き方を知り、定年後は「自分のやりたい事で働き続ける」と決める。

2003年、定年後の働き方を探るため、地域の活動を知り地域に関わる働き方を目指し、「大磯町第3次総合基本計画」のワークショップに町民として一般公募で参加。
ワークショップ終了後、参加したメンバーに声かけし、有志で「大磯だいすき倶楽部」（略称 ODC）を立ち上げ、まちづくり活動の縁の下のプラットフォームを目指しスタート。

2004年、ODC としての活動の広報手段として町の掲示板に注目し、「景観の中の掲示板マップ」町民活動の実態を探るため「大磯まちづくり活動団体一覧」を作成。
高齢者の活動の場を知るため、大磯町福祉保健課と共同で「大磯生きがいマップ」作成に関わる。

2004年、大磯漁協加藤組合長の依頼で、漁協の「魚朝市」のボランテイアを開始。
2005年、大磯の海の自然を子供たちに継承する為、「いそっこ海の教室」実行委員会開始。
2006年、湘南国際マラソン支援の為、ボランテイアで「大磯応援隊」結成。
2007年、「スポーツ吹き矢大磯支部」立ち上げ。町の介護予防事業として支援。

（魚朝市）

（いそっこ海の教室）

（スポーツ吹き矢）

2008年、高齢者の地域のたまり場として「こみゅにてー・パテイオ海鈴」オープン。
「湘南定置網」支援ボランテイアを ODC 有志で開始。
2009年、大磯の伝統地曳網と地産地消を体験する「大磯地曳網親子体験教室」開始。
2010年、「大磯市」開始に伴い、実行委員で参加 ODC として出店。

（海鈴健康麻雀教室）

（湘南定置網ボランテイア）

（大磯地曳網親子体験教室）

2013年、「大磯だいすき倶楽部」の NPO 法人化に伴い、理事長に就任。2018年退任。
この間、(2013年～2017年　計5回)「大磯まちづくりフォーラム」開催。
5回のフォーラムを通して、大磯町の移住促進に関わる課題を理解し、様々な人との出会いにより、「ふるさと回帰支援センター・大磯」設立と、「磯人ネットワーク」構築の足がかりが出来る。

大磯まちづくりフォーラム　開催内容　　(役職名は当時の肩書)

2013年、第1回　テーマ:海	
	基調講演:　藤村望洋　早稲田エコステーション研究所　代表研究員 記念講演1:　高橋　公　認定 NPO 法人ふるさと回帰支援センター　代表理事 記念講演2:　阿部裕志　(株)巡の環　代表取締役 パネルデイスカッション:「大磯の海を核とした町おこしのこれから」
2014年　第2回　テーマ:観光まちづくり	
	基調講演:安島　博幸(立教大学　観光学部　教授) 記念講演:野瀬暁彦(世界を放浪する旅人) パネルデイスカッション:「みんなでつくるまちづくり活動」
2015年　第3回　テーマ:コミュニティ・カフェ	
	基調講演:浅川澄一(公社　長寿社会文化協会　常務理事) 記念講演:竹内弘道(NPO「Dカフェ net」代表理事 パネルデイスカッション:「想いが集まる場所のつくりかた」
2016年　第4回テーマ:大磯移住と地域コミュニティー	
	基調講演:濱口晴彦(大磯コミュニティー・カレッジ学長) 記念講演:嵩　和雄(認定 NPO 法人ふるさと回帰支援センター　副事務局長) パネルデイスカッション:「大磯移住を支えるよそ者・若者・ばか者」
2017年　第5回テーマ:さあ、大磯で私たちの物語をはじめよう	
	基調講演:筒井一伸(鳥取大学　地域学部　准教授) パネルデイスカッション:「私達がつくる　未来の大磯像」

2014年、NPO法人大磯だいすき倶楽部として、(公社)大磯町観光協会理事に就任し、「新たな観光開発部会」を立ち上げ、「シリーズ　新内大磯ゆかりの偉人　計４回」「大磯お茶の間映画館　計２回」を開催。東日本震災支援の為、南三陸福興市支援開始。大磯市(おおいそいち)で出店。

(海鈴健康麻雀教室)

(湘南定置網ボランテイア)

(大磯地曳網親子体験教室)

（第2回大磯お茶の間映画館）

（南三陸福興市支援）

2015年、大磯在住早稲田大学名誉教授　濱口晴彦氏の主旨に賛同し、「大磯コミュニティーカレッジ」事務局として協力。「大磯うつわの日」に海鈴で新規出展。
大磯左義長保存支援の為、ODC として東光院の協力により「左義長木札募金」開始。
2016年、「第4の観光の核づくり委員会」に ODC として参加。
2017年、「大磯左義長インバウンドツアー」開始　大磯港オアシス整備事業推進会議に参加。
明治150年記念事業として「新内吉田茂」「大磯コミュニティーカレッジ・**ジョン万次郎**」開催。
「大磯港みなとまちづくり協議会」に委員として参加。
大磯宿場祭り実行委員会委員として、「インバウンドツアー」実施。

（大磯左義長支援　木札募金）

（大磯宿場祭りインバウンドツアー）

2019年、「大磯地方再生事業推進コンソーシアム」会員入会。　https://www.oiso-conso.com/
2020年、（一社）海鈴大磯設立。「ふるさと回帰支援センター・大磯　設立シンポジウム」開催。
https://bit.ly/3bTm22B
ふるさと回帰フェアーに　オンラインで初参加。　https://bit.ly/3uIQHbp
移住支援応援団として、「磯人ネットワーク」構築。　https://www.iso-jin.com/
大磯町と（一社）海鈴大磯の間で移住・定住協力協定　締結。 https://bit.ly/2ZYXPSC

「自分のやりたい事で働き続ける」と決めてから約 20 年。振り返ると今まで様々な「人の縁」で繋がっている事を実感。これからも人間関係を尊重して生きたいと思っています。

5. 稽古照今・寄稿：童謡爺さんのどうよう語り（第九話・第十話） 作詞・作曲家　高橋育郎

（第九話）

北原白秋が「赤い鳥」によって、童謡運動を始めるとき手本にしたのが、わが国伝統のわらべうたであったことは、まえに話したとおりなんだが、考えてみると爺が子供の頃は、このわらべうたを歌って、遊んでいたんだね。昭和10，20年代のことだ。とにかく子供の遊びの中心はわらべうただったんだ。

あの頃の子供たちは，天気がよければ外へ出て遊んだものだ。まずは4～5人そろうと「OOするものこの指とまれ」と人差し指を出して呼びかける。すると遊びたい子は寄ってきてその指をつまむように掴む。そして次から次へと集まって来る。こうしてたいていの遊びははじまるんだ。

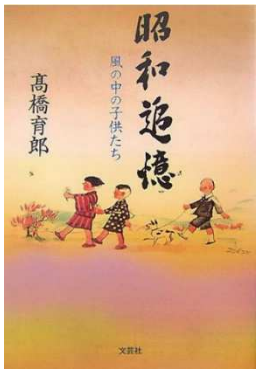
簡単な遊びは「鬼ごっこ」と「かくれんぼ」だ。「鬼ごっこするもの寄っといで、じゃんけんぽんよ、あいこでしょ」そして「かくれんぼ」のときは、そのあとに「もういいかい、まあだだよ」「もういいかい」「もういいよと」とつづくんだね。

ところで、いまはお正月といっても、ひっそりと静まりかえり、子供の声も聞こえないし、ましてや空に凧はあがってない。羽根つきの音すら聞こえない。さびしいもんだよ。

というわけでわらべうたは、あの頃でおわってしまったという気がする。

わらべうたは江戸のなかば以降、さかんになってきたんだが、爺さんたちまでは、伝統をしっかり受け継いでいた最後の世代となったんじゃないのかな。そんな風に思えてならないよ。

それで爺さんは、「昭和追憶」（2007 年）という本を出したんだが、わらべうたの伝統を絶やしたくないという思いなんだね。



ちなみにどんなわらべうたで遊んだか、主なものを拾ってみると「通りゃんせ」「花いちもんめ」「かごめかごめ」「ひらいたひらいた」「おしくらまんじゅう」「坊さん坊さん」「いもむしごろごろ」「今年のぼたん」「ずいずいずっころばし」「だるまさん」「あんたがたどこさ」などなど。これが爺の育った東京下町の歌だった。そして、わらべうたは全国各地それぞれにあったんだね。

白秋はそうした各地の歌をあつめて本にして、自分の手本にしていたんだね。たとえば「赤い鳥小鳥」などは北海道でうたわれていた「赤い山青い山」っていうのがあって「ねんねの寝たまに　何せよいの　あずきもちの　とちもちや　赤い山へ持って行けば　赤い鳥がつっつく　青い山へ持って行けば　青い鳥がつっつく　白い山へ持って行けば　白い鳥がつっつくよ」というのがあって、これが元歌になったんだね。でも誤解しないように。白秋はなんでもかんでもわらべうたを元にしたわけではないからね。

さて、ここでわらべうたの歴史をみてみると、江戸の文政（1820）に行智が『童謡古謡』という本格的な研究書を出して、いろいろなわらべうたを童謡という漢字にして、分類整理したんだ。‘子守唄（寝かせ唄、目覚め唄、遊ばせ唄）‘鬼わたし‘盆唄‘鞠唄‘天象　などに分類したんだ。これは画期的だったんだね。

さらに遡ると、平安朝の民謡といわれた風俗唄（ふぞくうた）。続いて流行した今様（いまよう）などを、嘉応元年（1169）後白河法皇が『梁塵秘抄』という本にまとめたんだ。この中に子供も歌える歌があるんだ。よい声で歌えば家の中の梁の塵までもうごくという意味なんだね。中で有名なのは「舞え舞え蝸牛（かたつぶり）　舞わぬものならば、馬の子や牛の子に蹴（く）えさせてん・・」というのがある。ではまた。

※　「夕方のおかあさん」サトウハチロー作詩　あの頃、日暮れになるまで子供たちは遊んでいた。「ごはんだよー」お母さん呼び声で、みんな家に帰って行った。夕空には星が瞬きだす。誰かが「一番星みーつけた」という。その声にこたえて、次の誰かが「二いばんぼしみーつけたー」とこたえ、三番星へと伝わっていく。懐かしい夕方の情景だ。

（第十話）

大正期のいわゆる芸術童謡では、白秋の向こうを張って、もう一方の旗頭は野口雨情だね。二人ともわらべうたを元にしていて、共通点もみられるが、雨情は民謡に根ざしていて土着性というか、土の匂いがぷんぷんするし、「十五夜お月さん」のようなどこか懐かしさのこもった歌が多いね。その点、白秋のようにあかぬけていなくて、庶民的といえるかもしれないよ。

「野口雨情記念 湯本温泉 童謡館」。0246-44-0500

「十五夜お月さん」といえば、作曲は本居長世だ。江戸時代活躍した本居宣長の子孫だ。雨情と長世の結びつきもすごいもので、童謡の名作をたくさん世に送り出した。この歌のエピソードといえば、長世のピアノ伴奏で、娘のみどりさんが有楽座で独唱会をやったことだ。実は童謡がステージで歌われた最初なんだが、感動が場内に沸きかえって熱狂的拍手だったそうだ。大正9年11月のことだった。

「雨情の宿　新つた」。0246-43-1111

みどりさんは、日本人形のような美少女だった。恵まれたことに長世には3人の娘があって、この三姉妹はそろって歌手になって、父について全国童謡行脚して童謡の普及につとめたんだが、その情熱はすごかった。「青い目の人形」などはずいぶん歌われたね。

あと、三木露風を上げなくてはならないね。「赤蜻蛉」があまりにも有名で、ほかに「野薔薇」を思い出すが、白秋にくらべて地味な存在だね。

さて、大正14年7月に「JOAK　こちら東京放送局であります」の甲高いアナンスの声で、ラジオの本放送が始まった。その声は、大きなラッパ型のスピーカーから聞こえるんだ。「蓄音機商売はあがったりになるんじゃないか」そんなこともいわれたが、いやいやとんでもない。ラジオを通して聞こえてくる歌に刺激されて、逆にレコードも売れたんだ。相乗効果っていうもんだね。そして、昭和は幕を開けた。

レコードが売れ出すと童謡歌手もつぎつぎ誕生して、レコード会社の専属になっていったね。

コロムビアは本居三姉妹はじめ、大川澄子を起用し、7年佐々木すぐるの「月の沙漠」のヒットを出し、飯田ふさ江や高橋祐子が続いた。

ビクターは、八十と晋平が、平井英子とトリオになり「アメフリ」「鞠と殿さま」「肩たたき」「雨降りお月」「証城寺の狸囃子」「シャボン玉」「黄金虫」などぞくぞくと出した。

ポリドールは5年に清水かつらと弘田龍太郎が組んで「雀の学校」や「うれしいひなまつり」。戦後に「花かげ」「からすの赤ちゃん」など出した。

キングは、講談社が昭和11年に始めたんだ。武内俊子と河村光揚が娘さんの順子と組んで「かもめの水兵さん」を出して、これはよく歌われたもんだ。

このあたり、爺は生まれていたから、物心がついたころには、これらの歌は全盛期で、前にも書いたとおりよく歌ったもんだよ。もう一つ忘れられないのは「どんぐりころころ」だ。青木存義詞、梁

田貞曲なんだが、爺が昭16、国民学校1年生の時、隣組の常会で、独唱させられた思い出の歌だからだ。梁田は「城ヶ島の雨」が知られているね。

「めえめえ児山羊」は大正童謡で藤森秀夫、本居長世のコンビだが、戦後に川田正子に歌われて、中学の教科書にも載った。ただ、正子さんは、この歌は痛々しくて好きになれなかったと言っていた。本人からじかに聞いた話だ。

大正の名作では、ほかに「雨」「あわて床屋」「靴が鳴る」「叱られて」「浜千鳥」「七つの子」「赤い靴」「からたちの花」「砂山」「背くらべ」「夕焼小焼」「春よ来い」「あの町この町」「この道」「てるてる坊主」「花嫁人形」などだ。では、次回から昭和の童謡へ移ろう。

※ 「雨降りお月さん」 元々は「雨降りお月」だったのが、いつのまにか「さん」が付いて歌われている。一番の歌詞は大正14年に「コドモノクニ」で発表した。それが好評により、追って「雲の陰」を加えた。曲は一番と違っている。雨情の最初の奥さんの輿入れの状況をうたったものだ。

※ 戦時体制の町内会は「隣組」といった。「とんとん　とんからりと　隣組」の歌がはやった。

※ 川田正子との出会いは、平成二年十一月。埼玉県杉戸町町制施行百年記念で親子のど自慢大会が行われ、ここに川田さんを迎えた。私と二人は審査員になった。
川田さんは独唱した。このあと銚子市の教育委員会による「川田正子ショー」に二人は呼ばれた。「森の木児童合唱団」も出演した。

（つづく）

6. 解説「関連データ・用語・仕組み」: VUCA(ブーカ)と OODA(ウーダ)

VUCA とは、1990 年代に米国陸軍で使われ始めた概念で、2016 年の世界経済フォーラム(いわゆるダボス会議)で、VUCA ワールドと云う言葉が使われたことにより、ビジネスの世界にも一挙に広まり、いまや、幅広く社会的にも概念化され使用されている。

- **V**olatility(変動性):変化が激しく不安定
- **U**ncertainty(不確実性):問題や出来事の予測がつかない
- **C**omplexity(複雑性):多数の原因や因子が絡み合っていること
- **A**mbiguity(曖昧性):出来事の因果関係が不明瞭で前例もない

要するに、VUCA とは、あらゆるものを取り巻く環境が複雑性を増し、将来の予測が困難な状態であり、適応力(レジリエンス)が問われる。

- 技術・手法を適用する環境が異なり、従来と同じやり方では通じないため、経験値の価値が低下し、新たな環境に適応したやり方が重要となる。
- 環境(前提条件)が連続的に変化し続けているため、ある時点/タイミングでの最適解よりも、いかに環境変化に柔軟に対応できるかが重要となる。

資料:第1回 VUCA 時代のプロジェクトとプロジェクトマネジメントの方向性 Tetsuto Yoshikawa (m&t) note 2019/10/07 https://note.com/ppf/n/nf7b46c4e40dd 他

こうした VUCA 的環境下にある社会(システム)において、工場のような管理可能な環境下において計画が完璧であることを前提にした継続的改善手法[統計的品質管理手法]である PDCA サイクル[Plan⇒Do⇒Check⇒Action]が有効であるかは疑問である。予定調和型の PDCA サイクルでは、環境の変化や想定外の事態への対応が後手後手に回る。

PDCA の欠点を補い、変化が激しい VUCA 時代に対応するには、状況に合わせて、計画の前に戦略が必要であるする OODA ループが有効である。

- **O**bserve:みる(見る、観る、視る、診る)、見抜く
- **O**rient:わかる(分かる、判る、解る)、状況を判断して方向付ける
- **D**ecide:きめる(決める、極める)
- **A**ct:うごく(動く)
- **L**oop:みなおす(見直す)、みこす(見越す)

OODA ループは、アメリカ空軍大佐ジョン・ボイドが開発したあらゆる分野で適用できる戦略理論で、朝鮮戦争(1950～1953)の空中戦で、ボイド大佐比着る味方一機で敵機数十機を撃墜したとされる戦果が研究の原点とされる。

出典:日本を支配する呪縛「PDCA」は日本ガラパゴスの概念。激変する現代社会では新しい理論が必要 松井克明 2018.10.24 HARBOR BUSINESS Online https://hbol.jp/177097

7. Blog 仕組みの群像 ： 東日本大震災 10 年の振り返り

2021 年 3 月 11 日、東日本大震災から 10 年が経過した。自らの経験も想起しながら、ブログにしたためた。復興五輪として誘致された TOKYO オリンピック・パラリンピック 2020 の聖火リレーも 3 月 25 日に、福島第一原発事故の前線基地として使用された J ヴィレッジをスタートした。まだ、大きな余震は続き、福島第一原発事故の措置は著についたばかり。発災後に勃興した震災アーカイブも閉鎖される流れの中、被災直後にはわからなかった被災の実態、そして被災後 10 年の経緯を経て、いま、どういう状況になっているのか、今後どうすべきなのか、改めて、システムズアプローチ的に取りまとめ、ブログにアップした。

▼Blog 仕組みの群像：東日本大震災 10 年の振り返り
https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/

8. Japa からのご案内

2021 年 3 月 17 日にオンライン開催した第 7 回 Japa フォーラムの論点提起「コロナ禍の対応からみえた日本社会の課題と脱却の道筋 ～Japa 新型コロナウィルス感染症 特設コーナーを開設して 1 年を経過してわかったこと～ 芝原 靖典（日本専門家活動協会 代表理事）」に使用した PPT 資料をホームページにアップしました。
▼Japa＞知のアーカイブ＞Japa フォーラム https://www.japa.fellowlink.jp/japa

9. つぶやき（編集後記に代えて）

桜が一気に開花し始めると同時に春の嵐で満開を迎える前に花びらが舞っている。コロナ禍のおかげで、今年も花見の宴会禁止の立て札が近くの大きな公園にも設置されている。確かに、騒がしい花見の宴会集団はいない。時折、団体ツアーと思しき一団が旗を掲げるコンダクターに連れられて歩いている。花見の風景も代わったが、最近、もっと、変わったと思えるのが公園に張られているテントの多さである。本当に増えた。そして、迷惑な場所にテントを張る者も増えた。梅や桜の木の下にテントを張り、花見客の通路や写真撮影のじゃまになっていても知らん顔である。いつから、そして何故、日本人の良さであった公共空間での立ち居振る舞いの節度が消えたのか。大相撲のマス席に毎場所連日、凛とした座り姿の女性観客がネット上で話題になっているをふと思い出すのはなぜだろうか・・・。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp
発行元：Japa 日本専門家活動協会 http://www.japa.fellowlink.jp/

Copyright © 2021 Japa 日本専門家活動協会